

新たな『水車小屋』へのアプローチ

演奏学科声楽専修4年

宮西一弘

この『美しき水車小屋の娘』の特筆すべき点は
・貴重な映像資料であること

・演奏者が独自の装飾音をつけて演奏する
という今までにないアプローチで演奏して
いること

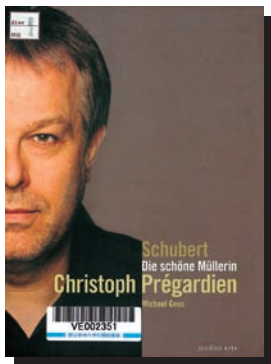
・現代のドイツ・リート屈指の歌手である
プレガルディエンの演奏であるということ
であると私は思う。

まず『水車小屋』の市販されている映像で私
が知っているのはディースカウの2種類のみ
である(ピアノはエッセンバツハとシフ)。こ
れらの映像はディースカウの引退直前の映像
で、さすがのディースカウも若干歌が崩れて
しまっているところもあり、やや残念なも
のである。しかし、このDVDはまだまだ現役
のプレガルディエンの瑞々しい歌が聴ける貴
重なものになっている。

次にこの映像の演奏はシューベルトの友人
であるフォーゲルの即興演奏を譜面に起こし
て作られたフォーゲル版を基に、演奏者が独
自の解釈で装飾音をつけて演奏するという手
法がとられている。逆に言えば楽譜どおりで
はないのであるが、原曲の魅力を損なわな
い装飾をつけており、これはこれで大変面白い
演奏である。

最後は一番重要であるといえる演奏者であ
る。プレガルディエンをご存知の方は少ない
かもしれないが、独特の柔らかい響きを持つ
生き生きとした若々しい声で、粉職人の恋と
失恋と死に向かつていく感情の変化を歌い上
げている。第7曲の『いらだち』が原調ではな
く低い調に移調されているが、それを補って
余りある素晴らしい演奏である。

『美しき水車小屋の娘』はバリトンやバスの
演奏もいいが、私はやはり若々しい声のテノー
ルが演奏するのが一番だと思う。ペーター・シュ
ライアー、エルンスト・ヘフリガー、フリッツ・
ヴンダーリヒなどの往年のドイツの歌い手の
名盤は多いが(個人的にはヴンダーリヒは美
声過ぎて粉屋の純粹さが感じられず、あまり
好きになれないのだが)、このプレガルディ
エンの映像もそれらと肩を並べるほどの素晴
らしい演奏であると思う。多分、この図書館
で唯一の『美しき水車小屋の娘』の映像資料で
あるので多くの皆さんに利用していただけた
らと願うばかりである。



請求記号 ● VE2351
Schubert Die schöne mullerin
(Medici arts : 2057308)

● みやにしかずひる この曲集の主人公に自分は似ている気がします。でも小川と話す粉屋はよほど友達がいなかったのでしょうか…

言葉で味わう音楽

音楽文化デザイン学科音楽創作専修4年

成清翠

突然ですが、曲を書くことはとても苦しい
です。完成という2文字に向かって自分自身
が突き進むわけですが、そこに辿り着くまで
に何が起きるか分からないのも、また楽しみ
でもあります。

この原稿のお話を頂いてから、何の資料を紹
介しようかしばらく悩みました。ましてや原
稿の締め切りと前期の作曲作品提出が同じ日
ということもあり、今まさに私はどちらも書け
ない不安と焦りを覚える日々を送っています。

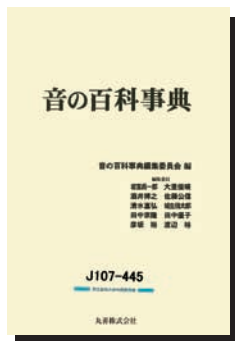
そんな時は大抵、巨匠と呼ばれる作曲家た
ちの楽譜や音源から、何かしらのヒントを求
めることが多いのですが、それともう一つ、私
がいつも参考にしている本があります。それ
は『音の世界を様々な切り口から解説してい
る『音の百科事典』です。

私は昨年から作曲のアイデアの一つとし
て、人間の構造や言葉に伴う音をテーマに取
り上げているのですが、そういった資料は音
響工学などの専門書などに多く見られます。
しかし、自分の『音』に反映させたかったので、
音楽そのものの観点で書かれている資料はな
いか探したところ、学生の皆さんにあまり知
られていない参考図書室の物理のコーナーで、
この事典と出会いました。

その名の通り、とにかく「音」に関することならジャンルを問わずなんでも書いてあります。「生成音声学」や「音響生態学」などの専門用語から、「カラオケ」や「スポーツ中継」などの生活の中で使われる身近な音の用語まで、ページずつ開くごとに新しい発見があるので、事典というより「音の参考書」のような感覚で読みました。また、調べたいことだけではなく、小説のように一気に読みたくなる事典です。

最近では或る文学のジャンルを扱った曲を書いているので、言葉が持つモローラ、所謂「音韻」のページを何度も読んでいます。(何が書いてあるか気になる方は是非読んでみてください) 出来れば家へ持って帰りたいところですが、残念ながら参考図書なので大学のみでしか閲覧出来ません。しかし私にとつて、作曲の苦しみから脱するための一つのアイテムとなっています。楽譜から見る音楽と、音源から感じる音楽以外に、言葉で楽しむ音楽も是非味わってみたいかがでしようか？

そして私はこの事典を片手に、一つでも多くのインスピレーションを受けて、一音一音書き進めたいです。



請求記号●R424/O
『音の百科事典』丸善

●なりきよみどり 大学生活も残すは半年。大好きな友達と共に、1つ1つの経験が素敵な思い出になるようにしたいです。



音楽研究科音楽学専攻2年 浅田直樹

このCDはムラヴィンスキー・ファンはもちろん、何度も耳にしている名曲を斬新な解釈で聴いてみたいという人にもおすすめの一枚だ。エフゲニー・ムラヴィンスキー(1906~1988)は、20世紀を代表する指揮者の一人で、レニングラード・フィルハーモニーと共に、数多くの名演を繰り広げた。彼の音楽は圧倒的で、一度それを体験してしまうと、他の演奏がしばらく聴けなくなってしまうほど、強烈な支配力を持っている。私が初めてムラヴィンスキーの音楽を聴いたのはこのCDだった。モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》序曲とブルックナーの交響曲第7番が収録されている。

まず、《ドン・ジョヴァンニ》だが、これは《フィガロ》と並ぶモーツァルトのオペラの最高傑作の一つで、序曲は短調と長調の部分に分かれている。冒頭からやたらと分厚いバスがフォルテで鳴り、まるで騎士長の亡霊が地獄の底からじわりじわりと迫ってくるような印象を感じずにはいられない。しかし、テンポがアンダンテからモルト・アレグロとなり、長調に移行する場面になると、雰囲気は一変し、疾風のごとく音楽は突き進んでいく。私が聴いた演奏の中で、これほどテンポを急激に変化

させている例は他にない。最初に聴いた時は、指揮者が興奮のあまり我を忘れたのかと思っただけだ。しかし、音楽の勢いは衰えることを知らず、聴いている方もだんだんその音楽の渦に飲まれていき、輝かしいクライマックスへと至る。

次にブルックナーだが、こちらは打って変わって静謐な雰囲気満ちている。全楽章を通して強弱のコントラストがはつきりしており、曲の核心部分を明確に表現している。依然として重厚な低音が目立つが、それがむしろ奥行きのある音響を作り出している。また、この曲が持つ叙情的な側面を強調しすぎることなく、音楽は厳格にコントロールされている。演奏は無味乾燥なものではなく、感情と知性が程良く調和している。特に第3楽章のスケルツォの弦のリズムにそれが表れている。

これらの曲には数多くの名盤が存在するが、それらと聴き比べてみると、このCDの面白さが何倍にもなるだろう。



請求記号●XD33088
Symphony no. 7 / Bruckner.
Overture to Don Giovanni /
Mozart (The Mravinsky Collection)
(Russian Disc : KKCC-6530)

●あさだなおき 日常生活に刺激を与えてくれるのは、新たな「発見」だと思います。みなさんも数多くの発見をし、豊かな生活を送りましょう。